



# 南郷

札幌市立南郷小学校 学校だより 第2号

令和8年4月30日

【学校電話】011-861-9305

【学校ホームページ】

<https://www.nango-e.sapporo-c.ed.jp/>



## 「嫌だ。お家に帰る。」

～学校に来るのが『当たり前』を見直す～

校長 関根 治彦

新年度が始まり3週間が経ちましたが、朝の校門前では、毎年と同じように泣いて登校を渋る子と一生懸命登校を促す保護者のドラマが繰り広げられています。『泣き顔の子』『困っている保護者』の双方はともに苦しい状態です。今回は、保護者の皆様が日々向き合っておられるかもしれない、ある『切実な場面』について書こうと思います。それは、朝の玄関先や校門で、お子さんが「学校に行きたくない。」と涙を流す、あるいは布団から出られずに固まってしまうという場面です。

こうした姿を前にしたとき、親として胸が締め付けられるような思いにならない方はいないでしょう。「何かトラブルがあったのではないか。」「このまま不登校になってしまうのではないか。」「自分の育て方が悪かったのではないか。」「——。そんな不安が頭をよぎり、つい焦りから「いいから行きなさい!」「どうして、行きたくないの?」「みんな学校に行っているのよ。行くのが当たり前なの!」と強い言葉を投げ掛けてしまい、後で自己嫌悪に陥る。そんな経験をされている方もいらっしゃるかもしれません。

しかし、まずお伝えしたいのは、「学校に行きたくない。」という涙は、お子さんからの決して『わがまま』ではない、大切なサインであるということです。

これまでは『学校に行くのが当たり前』という感覚でした。だから、私が子どものころは、学校に行かない=悪という感覚でした。そして、私が教員になった30年ほど前は学校に行かない=何か原因があるはずという感覚でした。そう『当たり前』は変化するのです。昔、私の父の世代に左利きを右利きになるように無理強いしたように。

文部科学省の調査や近年の心理学的知見においても、不登校や行き渋りの理由は決して一つではありません。特定のいじめやトラブルがある場合もあれば、本人にも理由が分からず「なんとなく不安。」「体が動かない。」ということも多々あります。以前の学校便りでも書きましたが、子どもに理由を無理に聞き出そうとすれば、子どもは理由探しをしなくてはならなくなります。大切なのは現状を受け止め、子どもに寄り添うことです。子どもたちは、学校という社会の中で、大人が想像する以上に高い緊張感をもって過ごしています。周囲の期待に応えようとして、友達との距離感に神経を使ったりする中で、心のコップにたまっていたエネルギーが、ある朝、限界を超えてあふれ出してしまふ。そのあふれた雫が『涙』となって現れるのです。

もし、お子さんが泣いて「行きたくない。」と言ったときは、どうか無理に理由を聞き出したり、正論で励ましたりする前に、まずはその気持ちを「そうなんだね。」「今はそんな気持ちなんだね。」と、まるごと受け止めてあげてください。原因を突き止めることよりも、まずは「ここは安心できる場所なんだ。」とお子さんが感じられることが、エネルギーを再充填するための第一歩になります。

学校としても、私たちは常に皆様と共にあります。『学校だより』という公の場でお伝えしたいのは、『学校は来るのが当たり前』ということを見直しませんか?ということなのです。(決して、来なくてもいいですよということではありません。学校は学びの場であり、友達と切磋琢磨する、成長には欠かせない貴重な場所です。)

私は遅刻してくる子に対して昔は「何時だと思っている。」と指導していましたが、今は「よく来たな～」と声を掛けるようになりました。「学校に来ることは当たり前」ということを見直したときに、登校して頑張っている子、帰宅してきた子への声掛けは変わりませんか?

私たち教職員も、『登校してくることが当たり前』とは捉えていません。保護者の皆様と一緒に、その子が「今、何を必要としているのか。」を考え、伴走する存在でありたいと思っております。保護者の皆様、どうか一人で抱え込まないでください。学校には、担任のほかに、養護教諭やスクールカウンセラーなど、力になれるスタッフがそろっています。「こんな些細なことで相談してもいいのだろうか。」と躊躇する必要はありません。どんな小さな不安でも、まずは私たちにお聞かせください。

今はほとんど行っていませんが、昔、6年生が卒業間近の時に、先生方を招いて『感謝の集い』を行っていました。その時に「○○君は1年生の時に『おうちに帰りたい』と言って、先生の膝の上で泣いていました。」という話を照れ笑いをしながら聞いている姿がありました。前述した『子どもと保護者のドラマ』を笑顔で見ている先輩保護者は、同じような経験をしている人たちが多く、「ああ、ああいう時もあったな～。頑張れ!」と見守っているはずですよ。

お子さんの歩幅は一人一人違います。雨の日もあれば、風の日もあります。私たちは、お子さんの笑顔がいつか自然な形で戻ってくる日を信じ、ご家庭と手を取り合って、ゆっくりと歩いていきたいと考えております。今、現在、困っている子どもや保護者の皆様が早く、前述した6年生や先輩保護者の仲間になれることを祈って…。